

覚えなければならぬ、たいていその教派の教会にとどまり、そこでの礼拝と信徒の交わりを通して、その教会を自分の教会とするようになる、と同時に、そこで学び得た聖書理解、信仰理解を「正統なキリスト教」とするのが一般的である。

×

×

人が教会に行くという場合、その自覚の程度の差はあってもそれぞれに、自分の人生の生き方を求めて行く。そして自分の人生の生き方を求めるとは、ほかでもなく、自分の内に安心を得て充実した日々を過ごしたいという求めである。それを一口に言えば「人として本当に幸せでありたい」という願いなのである。教会はその願いを神にたいする信仰に於いて応える場として存在している。そして、その拠り所を、プロテスタントの教会は只一つ神の言葉としての聖書に拠っている。それ故に聖書の解き証しを礼拝という行為をとおして熱心に行い、信徒はそれを学び受ける。

×

×

しかし、教会の教派を知るとき、唯一の神の言葉として拠り頼む当の聖書の解釈が、それぞれに微妙に違い、ときとして相当に相違することを知ることになる。ましてや、「私たちの教会は聖書の教会だが、〇〇教会は非聖書的だ」などと言われると、素朴に求道している信徒は戸惑いを覚えることになる。加えて、聖書の福音が与える人間の救いについての解き証しに相違があつ

たり、さらに、救いについての確証についての理解が異なったりすると、ますます求道の人は不安を覚えることになり、各教派間で自分の教派の聖書的な正統性の主張を巡って激論となったり、激烈な争いとなったりする。このことはイエス・キリストに於ける愛と謙虚、平安と喜び、力と希望を宣教する教会にただならぬ不信を信徒に抱かせることになる。

×

×

私の場合は有り難いことに、牧師自身が自分の求道と宣教とに熱心であり、属する教団の性格もあって、特に教派云々は聞かなかつた。しかし、ときとして遭遇する熱狂的教派や高慢な牧師や信徒等から、他教派を口汚く罵る言葉を聞くことがあつた。また、キリスト教年鑑などに掲載されている数多くの教派、教団の紹介説明に自教派の聖書的正統性を主張するような名称や文面に接するとき、ときとして滑稽さを覚えた。このような教派のそれぞれの自己主張に嫌悪を覚えながら、どのようにこの事態を理解すればよいのか、当時は迷っていた。その内に、まさに思いもかけぬ事が私自身に起こつた。

×

×

当時、親しく私に関わつて下さつていた学校のD先生がおられた。不思議なことに、米国文学専攻のその先生と語学の能力では全く落第生の私が、ひよんな事から先生の家族ぐるみで親しくさせていただくことになつたのだが、そんなある日、「あなたはクリスチャンだね。米国の大学

で友人であったCという米国人の宣教師が大阪で神学校の院長をしている、何でも、教派を無くする運動をしているらしい。松下さん行ってみませんか」と言われたのである。それは晴天の霹靂であった。「なんでも、教派を無くする運動をしているらしい」という一言は、当時の私にとって実に衝撃的な言葉であった。

×

×

「教派を無くする運動」と聞いたとき、これは凄いことだと思った。密かに願っていたことが、現実にあるのだ、と思った。しかし、それはD先生の表現であって、事実はもっと具体的で、当時の私にとって最もすばらしいキリスト者の集団であり教会であるように感じられた。一つに新約聖書の教会に単純に戻る事によって教会の一致を求める。即ち「聖書の語る所を語り、聖書の黙すところは黙す」「信仰の本質的な面では一致を、非本質的な面では自由と愛を」「どのような組織も作らず各教会は完全な独立と自由を」勿論、職制は特に定める必要なし。そして、神学校は牧師の養成を目的とせず、聖書を学び、キリストの証人として生きる人のためにあるだけ。というのであるから、正に私にとっては夢のような理想の所であった。

時をみて、私はD先生に連れられて大阪の神学校のC院長宅を訪ねた。喜んで迎えて下さった院長は、米国の映画俳優のグリーク・パソックりの温厚な人であった。D先生は最高の言葉で私を紹介推薦してくださった。C院長は大きな手のひらを翳して、優秀な学生が来たと大喜びの様

子であったが、入学するや忽ち院長は失望されたに違いない、出来ない生徒だったのである。このようにして、わたしは学校を中退して神学校に入学した。時に私が二十一才である。家族の者は誰も反対しなかった。これはとても有り難いことであった。

×

×

一方、その神学校の内容と入学の希望とを息弾ませて感動的に語る私の言葉を、じつと聞いていたE牧師は、「うん……、」と思索し、次のように言われた。「その教派は確かか」と念を押すように尋ねられた。そして「僕は君をD大学の神学部に推薦しようと思っていたのや」そして、「Uさんと一緒にここから洛南に向かって奈良に至るまでを伝道圏としようと考えとったんや」と言われた。U氏は後に日本キリスト教団の総会議長を何期も務めて、教団の混乱の時期を切り開く働きをされることになる。

×

×

どこの「教派立神学校」もそうであるように、入学して分かった事は、当時の学生の殆どが所謂そのグループの教会の出身であった。おそらく、私のように教派について問題を覚え「教派を無くする運動をしているらしい」ということをきっかけとして、他教派から入学して来た者は、少なかつたのではないかと思う。

×

×

神学校は教師も生徒もキリスト者として信仰的善意に満ちた人達の群れであった。教派立神学校にときとしてみられる熱狂的、排他的且つ独善的なそれらは学生として特に感じる事はなかった。

学校での学びは、聖書を単純に受け入れ、特に新約聖書にある教会を「あるべき教会」とし、その教会を「ある教会」とすべく、その在り方に於いて「新約聖書の教会」を素朴に回復することによってキリスト者の一致を実現しようとした米国での運動の歴史についてであった。したがって、学びの中心は新約聖書を素朴にそのまま受け入れ、近代的な聖書神学および組織神学的な一切は排除され、聖書をそのまま学ぶことを専らとしたものであった。そのような学びの姿勢は「神学校」ではなく「聖書学院バイブルセミナー」という名称にも表れている。

このような聖書についての単純素朴な信仰の態度は、とても大切なことであり正しい宗教性を保障することだと言える。

II 聖書的ということ

—信仰における「信」と「知」—

しばらくして重大な出来事が起こった。それは、私自身の「洗礼」に関することである。

端的に言うなら、新約聖書に於ける「洗礼」は、イエス・キリストの御名による全身水に浸す形式と内容とをもったものであり、その方法に従って行うことが「聖書的」であり且つ、聖書における本質的なことだといふのである。

ところが、私が受けた洗礼は浸礼ではなく「滴礼」といわれる形式のものであり、聖書の洗礼に忠実に従うなら「浸礼」を受けなければならないか。ということであった。

このことは私を極度に悩ました。私にとって「洗礼」ということは人生の態度決定という決断による神との関係に於いて生じた事柄であり、その形式が「聖書的」でないからといって、簡単に先に受けた洗礼を否定するようなことは出来なかった。私は誰にも相談することなく幾日も思ひめぐらした。侵礼という洗礼の形式が聖書に於ける形式であることは了解出来る。その限りでは滴礼から浸礼に変えることは所謂「簡単なこと」なのである。だが、私にとって問題はそれだけのことではなかった。

×

×

洗礼と聖餐とは新約聖書にあっては神の奥義としての事であり、サクラメント（見えない神の恵みの見える形）であると教えられ学んで来たし、神の一方的な救いの行為に人が信仰に於いて決断し受入れ従うことが洗礼だと理解していた。事実、使徒パウロは洗礼について次のように語

っている。

……罪に対して死んだわたしたちが、どうして、なおも罪の中に生きることができよう。それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるとすれば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。死んだ者は、罪から開放されています。わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。

—ローマの信徒への手紙六章一節以下—

さらにパウロは次のようにも言う。

つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。
—コリントの信徒への手紙Ⅰ—二章—三節以下—

使徒パウロに於いて「洗礼」とは以上の「事」だったのである。要約して言うなら、洗礼は、キリストの死と復活にあずかる事だった。この出来事を彼はコリントの信徒への手紙Ⅱ五章—七節で感動的に語っている。

キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造されたものなのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。

×

×

洗礼に於ける新生の出来事は、それを信ずる者にとってではまさに、自分の心身に起こった驚くべき神の出来事なのである。即ち、神の見えない一方的な恵みが、見える形で我が身のうえに恩

恵として生じたサクラメント即ち奥義なのである。この出来事をわたしは洗礼に於いて感動してお受けした。そのところで限つて言えば、洗礼が「滴礼」であるか「浸礼」であるかという方法与形式とは、もはや本質的なことではなくなる。わたしは洗礼をそのように理解していた。

ところが、「浸礼」という方法与形式とが聖書の洗礼なので、それに従うことが聖書のだから浸礼を今一度受けなおすのが正しいと言われると、形式については納得出来ても、洗礼に於いて生じた神の出来事をどのように了解すればよいのか、私は全く困つてしまった。

×

×

このような私の困惑は学校での友や、教師の方々には理解できなかつたのではないか。先に述べた通り、彼らの殆どが、浸礼という洗礼の方法と形式とが「聖書的」だという了解が、何の問題も無く始めから教えられ受け入れられており、従つて「滴礼」という方法を正して「浸礼」という方法で洗礼をやり直す事は、当然のことだと受け取られたのではないかと思う。つまり、その人達にとって洗礼をやり直すことは、ただ聖書にそのようにある形式と方法だから、それに適合して改めるだけの問題として理解したのではないだろうか。そこでは、洗礼が信仰者当人に對して秘めている神の出来事という、最も大切な一点が簡単に欠落してしまつてゐる。

聖書に基づく信仰に於いて、このような本質的な「事」が問われないままで、形式と方法だけに従う「聖書的」という、その「聖書的」とは一体どういう事なのだろうかと不安を覚えた。

しかし、「浸礼」という形式には殊更反対する理由はなかつたので、とりあえず「形式」だけのこととして浸礼を受けることとした。その時に、悩んだ末に自分自身に対して出した無理やりの結論は、「滴礼は浸礼を包括出来ないが、浸礼は滴礼を包括出来る」と言う論理であつた。だが、よくよく考えてみると、この包括の論理は、正しい解決を方向づけるものではない。だが、当時は真剣そのものであつた。

その結果、先輩の○先生の奥さんになられる方のお宅に前夜から泊めて頂き、翌早朝お二人に導かれ大阪府の箕面公園の滝壺の下流に於いて「浸礼」という「洗礼」を受けた。その日はとても寒い朝だつた。そのときにお世話下さつた○先生夫妻の温かいご配慮には今も感謝している。

×

×

「浸礼」の出来事は、私に改めて「洗礼」について歴史的なその起源およびバプテスマのヨハネやイエス、それに原始教団、パウロ、そしてパウロ以後の「洗礼」の変遷を尋ねるきっかけとなつた。この事は、当時日本に於ても一般に流布しだした新約聖書批評学への関心を一層強める方向へ私を導いていった。と同時に、神学校を支える「キリストの教会」とその「復帰運動レストレーションムーブメント」のもっている問題性の何か、を私なりに問いはじめるきっかけともなつた。そして、その問いはやがて、自分の信仰を問う意味でのキリスト教批判、宗教批判、人間批判、現代批判へとつながって行くことになつたのである。

神学校に於ける私の洗礼バプテスマについての出来事は、「聖書的」ということの意味を考えさせるきっかけとなった。しかし当初は、この出来事が提示する問題が、それまでのわたしのキリスト教信仰の反省にちなり、ましてや、所謂「伝統的キリスト教」批判に発展していくようになるうとは予想していなかった。

言うまでもなくキリスト教は聖書を教典とする聖典宗教であるが、カトリック教会とプロテスタント教会とは、聖書についての理解が分かれる。カトリック教会は聖書と伝統とを同等のこととして受け入れるが、プロテスタント教会は「聖書のみ」を主張する。

このように聖書のみを權威とするプロテスタント教会の信仰の在り方は、それ自身是とされるが、ここに一つの問題が生じてくる。それは、聖書の何をもって神の權威とするかということである。つまり、聖書の一字一句を即神の言葉とするなら、そこには人の言葉の介入を否定するところが起こって来るし、一方、聖書の言葉を人の言葉とするなら、神の言葉としての聖書の權威が否定されることになる。

聖書の言葉の一字一句を神の言葉とする場合の根拠は、「聖書はすべて神の霊の導きの下に書

かれた」(テモテへの手紙Ⅱ三章十六節)とする聖書の言葉に求められる。しかし、このところをよくよく思いめぐらしてみると、これを聞くそこにすでに、その者の聖書の解釈があり、解釈した人の主観化がなされると言える。事実、先の聖書の言葉をめぐって様々な解釈がなされ、論議されている。それこそ紛れもなき主観と主観とのぶつかり合いにほかならない。また、「聖書の一字一句が神の完全な言葉」とする解釈、つまり、逐語霊感説の解釈では、聖書の文字それ自体が神格化され偶像となり、人間的な要素が殊更に排除され無視されてしまうことになる。

そのような立場は人が解釈学的努力として「神学すること」を軽々に否定してしまふ。しかし、否定した人自身すでに己の主観的な解釈に基づいてそれがおこなわれているということに気付いていない。その姿にはイエスを苦しめた律法主義者パリサイの亡霊を見るのは私一人ではあるまい。このように「知の犠牲」または「知の放棄」によって成り立つ信仰は、ときとして原理主義的狂信を生む。または、考えることを失った常識的な善人にとどまる者となる。彼らの、「聖書は神の言葉である」という、聖書の神的面についての畏敬は評価できても、その熱心の故に、聖書について独断的な思い込みを生んでしまうことには危惧を感じる。

×

×

一方、人間の知による解釈だけをもって聖書に対するとき、その知的な熱心さは評価出来ても、聖書が秘めている神的な要素に対する信仰の欠落が生じ、聖書がただの学的な関心の対象となつ

てしまう。そこには信仰の書としての聖書はない。神の言葉という側面をなくした聖書は、もはや聖書とは言えない。このことを、パウロの言葉（ローマの信徒への手紙十章二節）を振^もつて言うなら、彼らが熱心に聖書を研究していることは認めますが、その熱心さは、正しい認識に基づくものではありません。なぜなら、神の義を知らず、自分の義（自分が作る正しき）を求めようとして、神の義に従わなかったからです。ということになる。

聖書の言葉は人間の知的理解、つまり主観的努力だけでは究めることが出来るものではない。なぜなら、聖書はその全体が、人をして神の命のたぎりに開眼し、参与させる生き方を促し、それに与かるように聖霊が込められているものだからである。

×

×

では、私たちは聖書に対してどのような態度で関わればよいのだろうか。すくなくとも、聖書の文字をそのまま引用するだけで、それ以上何も考えようとはしないことで「聖書的」と安心し満足することで留まってはならない。むしろ、聖書は、その言葉が引^ひつ張り出された、そこから言葉に秘められた真理としての内容が語り始めるのである。それを聞き受けるに相応しい霊的な信仰と知恵とが、聖書の言葉に対峙した者に求められる。

それ故に、聖書の言葉を聞き受けるに相応しい霊的な信仰と知恵とを欠いたままの、ただの知恵と知識による探究は、たとえそれがどれほど深いものであったとしても、聖書が秘めている命

のたぎりに届くものではない。このことをパウロは次のように言っている。

キリストに根を下ろして造り上げられ、教えられたとおりの信仰をしっかりと守って、あふれるばかりに感謝しなさい。人間の言い伝えにすぎない哲学、つまり、むなしいだまし事によつて人のとりこにされないように気をつけなさい。それは世を支配する霊に従っており、キリストに従うものではありません。

—コロサイの信徒への手紙二章七節以下—

自分の存在の根を深くキリストの中へ植えつけ、キリストにあつて自分を築き上げられよ。なぜならキリストの内には人を真に生かす知恵と知識との働きが秘められてあるからだ、とパウロは言う。(コロサイの信徒への手紙二章三節) 彼に於いてキリストとは人を真に人へと確立させる神の知恵と知識の働きそのことだった。その意味で聖書はその働き即ちキリストその事を表出する宗教言語としての書物だと言える。そのような聖書の言葉を、イエスについての客観的情報を伝える記述言語と理解してはならないし、また「一意的な行為規範を与える倫理の言語」として受けてはならない。ましてやその受け方を「聖書的」などと言ってはならない。

さて、「知識」^{グノーシス}と「知恵」^{ソフィア}を聖書学者ウイリアム・バークレイは次のように説明している。

「知識は真理を理解する力である。それはほとんど直観的と言える力である。何かを見たり聞いたりしたとき、真理を言わば閃きのように把握する力である。しかし知恵は、一度真理を直観的に把握したなら、賢明で知性のある論理と観念とを用いて、真理を堅く保ち続けて賛美する力である。知識は、人が用いて真理を把握するもの。知恵はそれをもつて人がもつ希望に根拠を与えてくれる。」

つまり、知恵も知識も神の創造的な力であり、キリストの働きそのことと同一であり、同時に聖霊の業でもある。聖書はこの実存の根底に働く命のたぎりを提示し、それに人を開眼せしめる神の働きの書である。その意味に於いて「聖書はすべて神の霊の導きの下で書かれた」ものである。

×

×

聖書は明らかに歴史的な人間の手になるものである。その意味で、聖書は決して真理を保証するものではない。しかし一方に於いて、聖書は歴史を超えた永遠的な真理を人間を通して指示している。その意味では、人間の言葉ではなく神の言葉である。だからこそ、「聖書はすべて神の霊の導きの下で書かれた」と言うとき、その一字一句が即神の言葉ということではなく、聖書が語り示す内容としてのキリストの福音そのことが神の霊の導きのもとで書かれた」というのであ

る。

これを別な言葉で表現するなら、聖書には神的要素と人的要素とが一つとしてあり、従つて、人的要素は人的要素を用いて探究しなくてはならず、神的要素は神的要素を用いて探究しなくてはならない。それは、あたかも「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に」と言うイエスの言葉に見ることが出来る。しかし、人的要素は決して人的要素自体に於いて充足しているものではない。それは、神的要素も同じである。つまりその関係は分けることが出来ない不可分なそれでありつつ、同時に決して同じではない不可同なことなのである。にもかかわらず、そこには神的な元に於いて統合されていると言う意味に於いて関係は不可逆なのである。

聖書は「知恵」と「知識」とを以上の関係で語っており、それ故にこそ、聖書の言葉の一字一句がそのまま神の言葉または、真理を保証するものではなく、人が人として生きているその根底が何であり、従つてすべてをその一点から出発すべきであるという真理としての命のたぎりを人の主体に促している。この生の事実に関眼することこそが聖書の願いであり、聖書が存在する唯一の理由である。そこでは、文字に囚われた「聖書的」ということは存在せず、何の意味も持たないばかりか、「義文は人を殺す」結果になる。

×

×

二十世紀に於いて最も進歩した学問は原子物理学であることは衆知のとおりだが、聖書学もそ

の一つであると言われる。聖書学の分野は聖書についての歴史的研究、聖書の文献学的研究、聖書の言語についての研究、聖書の解釈説明についての研究、それに考古学的立場からの研究などを含んでいるが、それらの研究の成果が新しい発見も含めて、一度に花が咲いたように、多くの研究者によって提示された時代こそ二十世紀であったと言える。しかも、それらの情報が様々なメディアを通して誰でもがその能力と関心に応じて、ある程度常識レベルで受け取ることが出来るように一般化した時代でもある。

×

×

そのような状況に於いて、聖書学的な知識も能力もないただの信仰者にすぎないわたしの目の前にも届いたのが「史的イエスとケリユグマのキリスト」という問題であった。これは、歴史的な存在としてのイエスは、神の愛の支配を宣べ伝えたが、その後、原始キリスト教会は、そのイエスをキリスト（救い主）として提示し、イエス・キリストに対する信仰を求めようになったが、その転換はどのようにして起こったか。また、その関係をどのように理解すべきか、という問題である。

これらの問題に関する専門書はある程度翻訳本があり、専門家の解説書もあるので、問外漢の私が知ったふうに語る事はおこがましい。興味のある方はそれぞれの書物に接していただきたいと思う。ただ、私がこれらのことに目をつぶることが出来なかったのは、聖書学的興味からでは

なく、信仰人として生きる自分の生き方を明確にしたいという求道心からであった。堅い言葉で言えば、それは私自身の宗教的実存に関わる切羽詰まった問題意識からであった。

ちなみに、この問題を自己の信仰的生の問題として文学に於いて問い、自ら答えを出した一つが、遠藤周作氏の「イエスの生涯」と「キリストの誕生」であることは多くの人が知っている。

×

×

聖書は信じるものであって、とやかく理屈で理解すべきものではない、という前提での聖書に對する妄信を「信仰」と言い、そのように生きる事が信仰の人と言うなら、その信仰は、忽ち狂信となり、独善に墮し、排他的且つ反社会的、非人間的な姿に変質する危険性をもっている。事実そのような信仰人と集団が過去の歴史に於いて、様々な醜い争いと悲惨とを「キリスト教」という名に於いて生み出されて来たことを私たちは知っている。それは聖書が提示している事からは正反對のことである。なぜなら、聖書は、人間と世界とを根源的に救済する神の真理が提示され、またそうなるべく促す内容を秘めているものだからである。

×

×

聖書は直接的に真理を保証するものではない。これは聖書に於いてだけ言われるものではなく、この世のどのようなものも、決してそれ自身直接的に真理を保証するものなどではない。その意味で「十戒」が提示する事は正しい。

あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。あなたはそれらに向かつてひれ伏したり、それに仕えたりしてはならない。

—出エジプト記二十章四節以下—

×

×

聖書は真理を指示するもの、または証示するものであって、それが何処から出て、何を指し示しているのかということ問わないまま、また知らないままでやたらイエスやパウロの言動を金科玉条として振り回し、真似てみてもそれは猿回しの猿に等しいと言えないだろうか。

×

×

先に述べた「史的イエスとケリユグマのキリスト」の問題は「イエス中心主義とキリスト中心主義」という問題でもある。もつと身近に考えるなら、それは、所謂「キリスト教」はイエスから始まったのか、イエスをキリストとする信仰から始まったのかということでもある。

×

×

今日、私たちが知っている「キリスト教」はイエスの弟子たちが、十字架にかかって死に、そして復活したイエスこそキリスト（救い主）だと、宣べ伝えた（ケリユグマ）時から始まった「キリスト教」を基本としている。つまり、キリスト中心の立場ということになる。とすると、

神の恵みと愛の働きとしての「神の国」（神の支配）を提示し、自らそれを生きられたイエスは
どうなるのか。このようなイエス中心の立場は、先の弟子たちのキリスト中心の立場と、どのよ
うな関係になるのか。そして、どのようにしてイエス中心の立場がキリスト中心の立場になつて
いったのか。それは、イエスの提示したこと、弟子たちが伝えたこととの関係は何処で一つに
なるのかということでもある。

これが「史的イエスとケルグダムのキリスト」という問題が私に突きつけてきたことであつた。

×

×

このような状況の下での信仰の人の反応は様々であつた。真剣にその問いに取り組もうとした
人。そのような問題提示とそれに関心をよせる事自体、悪魔的で不信仰、または聖書に基づく福
音信仰には関係は無いとして無関心の態度を取つた人。そして、全くそのような問題に無知な人。
その善し悪しはともかく、わたしの場合は、わたしの信仰的な実存の立場から、私なりの決断を
なす為に関心をよせていった。それは、すでに私自身の中で、同じ様な問いが芽生えていたから
でもあつた。

×

×

ともかく、わたしは福音書に語られているイエスを見つめる事から始めた。その際、所謂福音
書研究に於ける様式史的方法から編集史的方法といった方法論の成果を一般に流布されている常

識程度に了解しながら、イエスが立ち、イエスが知り、イエスが提示したそれが何だったのかということを聞き出そうと願った。

福音書とは新約聖書にあるマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書のことであるが、それは「イエスの言葉と行いを伝える伝承を収集し編集して簡潔な物語として叙述した文章のこと」である。その意味で、その伝承と史的イエスとの関係や伝承と原始教団との関係、さらに伝承と編集者による解釈との関係等を学的に解明していくことは、イエスをより正しく深く知るうえで大切なことであり、誠実な研究者の成果をいただくことは有り難いことである。しかるに、「信仰的信念とやらで軽々にその作業を否定したり無視したりすることは、イエス理解において、^{ひい}鼻^いの引き倒しになってしまいかねないのではなからうか。

×

×

福音書を通して知るイエスは、多くを語る人ではない。イエスはただ一つのことだけを全身で繰り返し語り、示し、人々がそれに開眼することだけを願われた。その一つこそ「神の国」である。

イエスは言われた。「神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひ

とりでに実を結ばせるのであり、まず莖、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。」

更にイエスは言われた。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巢を作れるほど大きな枝を張る。」

—マルコによる福音書四章二六節以下—

イエスが示される「神の国」とは、神の創造的な命のたぎりとしての支配的な動そのもの、一切の存在の根底に躍動している支えそのものの事なのである。その神の命が「あなたがたの内できこっている」とイエスは明言された。(ルカによる福音書一七章二一節)

III カール・バルト、ルドルフ・ブルトマン、エミール・ブルンナー

私が神学校に入ったころ、日本の神学界ではカール・バルトを中心とした所謂弁証法神学がさかんに論じられ、一般の関心のある人々の間でもハッキリ理解出来ないまままで語られていた。

二十世紀の神学はカール・バルトとともに始まったと言われるほどに、彼の福音理解、聖書理解と強靱な信仰と思索は、正に神学が哲学化し、神がただの理念化され、神が世俗の中で見失われつつあったその時に、人は如何にして神について語りうるか、という問いに、一つの明確な答えを投げつけることによつて、聖書の神を復活させる働きを成した人である。その意味で彼は、十六世紀に信仰の復興をなし遂げた改革者に匹敵する、今世紀最大の神学者と言われている。彼の神学についての解説書は多くあり、特に中心的な著書である「教会教義学」全巻が日本語に訳されて出されており、彼の神学を誰もが知ることが出来るのは有り難い事である。深く知りたいと思われる方は、直接それらの書物に目を向けていただきたい。彼は、一九六八年八十二才でこの世を去った。

×

×

とにかく、私も深く彼の神学を知らないままで、バルトの示すところに引かれていったが、まとまつてその信仰理解に間接的にふれたのは、桑田秀延氏の「基督教神学概論」においてであり、「弁証法的神学」など、また彼が訳したバルトの「われ信ず」であった。そしてバルトの「ロマ書」に接したのは昭和八年に東京神田の新生堂から出版された丸川仁夫氏訳の古本においてであった。その後吉村善夫氏が訳したものが出たが、私は神学校の勉強をほうり出して、頭をかかえながらその一字一句を噛みしめ、胸踊らせながら読んだ事を今でも思い出す。そして、後年滝沢

克己氏の「カール・バルト研究」において、別なバルト理解を得たりしたことは有り難いことであつた。とにかく、バルトの福音理解を正しく受け止めたか否かは別として、彼の神理解とその啓示論、さらに聖書解釈には大きな影響を受けたことは事実である。

バルトと同時にエミール・ブルンナーという神学者のことが、特にバルトとの啓示論をめぐるの論争を知るようになった。さらに、ルドルフ・ブルトマンという聖書学者の「新約聖書と神話論」をめぐる「非神話化」という論議が身近なこととして話題になつてきた。

これらのことは、ただの神学的な理屈の事柄としてではなく、私自身の聖書理解、福音理解、信仰理解、つまり信仰人としての生き方との関わりに於ける重大問題を提示する内容を持つており、私に態度決定を突きつけてきたのである。

たとえば、バルトから学んだ大切な一事は、神は神であつて人は人である。その距離は絶対的な質的差異があり、神は人にとって絶対他者である。だが、ただイエス・キリストによつてのみ神は自己を啓示され、その神の呼びかけを人は聖書を通してだけ聞き得るのであり、それに人が応答するところに信仰が成り立つのだということを明確にさせられた。さらに、神の自己啓示は

三位一体的に秘められた神と人（世界と歴史）との関係が、神の絶対主権と神の聖、神の愛と恵みとしてあり、そこから、神について、創造について、人間について、和解、救済、終末についてなどを、徹底した聖書原理に基づくキリストと聖書の原事実への靈的迫りに驚嘆させられ、ますますキリスト信仰と聖書原理の真理性に確信を与えられた。わたしはそのことに関する限り、バルトの福音理解を聖書的にもっとも正しく、その信仰に、正に悔い改めをもって共感したのである。加えて、当時バルト達が「ドイツ告白教会」を組織し、ヒトラー率いるナチスの政權、特にナチス傀儡の「ドイツ的キリスト教会」の信仰理解に、決死の思いで抵抗し、自らの信仰を告白実践した姿に、深く感銘した。このような、福音理解、聖書理解の延長線上に於いてわたしが記したのが「信徒手帳」という冊子であった。その時、私は所謂巷のバルテアンの端くれに列していたと言えよう。

そのような状況に於いて、バルトとブルンナーの啓示についての論争も、バルトの論が聖書的であり、正しいと思っていた。その論争の内容は、人は完全に神との関わりを失ってしまったのか否か、ということにつきる。難しい議論の内容はともかく、ブルンナーは、人は確かに神との関係を破壊してしまつてはいるが、決して完全に失ってしまったとは言えない、神との関わりを持つことが出来る部分が残存している、と主張したのに対して、バルトは絶対に「否」を叫び、ただ聖書が証示するイエス・キリストによってのみ、人は神を知り且つ関わる事が出来ると神

の絶対主権性と義とを主張したのである。当時、私はバルトの立場に共感した。

しかし、ブルンナーが提示した問題は、人が神との交わりを回復するという出来事についての、とても大切な内容が含まれていたことを、当時の私には全く見えなかった。それはバルト神学が持っていた問題であり、このことについては後で述べることにする。

×

×

ここで「神学する」ということについて一言私の見解を述べておきたい。（「神学」についての厳密な歴史的経緯については、適当な書物をご覧いただければよいと思う。）世の熱心な信仰の人は、ときとして神学をキリスト教の信仰を哲学的に合理的思弁論述することだと思ひ込み、「神学」を信仰に反することのように考えている。たしかに、そのような態度で神学している者もあるようだが、私にとって神学するとは、神が人間に備え与えてくださった精神の活動、つまり考え、理解し、真実に到達したいという願いとしての働きの能力をもって聖書に関わることだと思つている。本来「学」とは「問う」ということであり、その意味では「聖書に問う」行為が「神学すること」だと言えよう。さらに、この場合の「聖書に問う」とは、「神と人間と世界の真実を問う」ことであり、かつ、「その関わりと在り方とを問う」ことである。その意味では、信仰の人はどの人も、神学することに於いて主体的に日々決断して生きているのだと言える。従つて、信仰の人が、盲目的に聖書の言葉に従うことによつて他律的に生きるなら、その人は聖書

の文学をインプットされたロボットになつてしまふ。

人間に与えられた本来の精神の活動としての「神学」は、「神学」を自己検証し、さらに自己否定する働きを秘めているものであると私は思っている。その意味で、自己検証と自己否定とを秘めていない「神学」は本来の神学ではないと思つている。

さて、バルト神学の後、私のもとに押し寄せてきた神学の大波は、聖書の批判的研究ということであつた。それは主として、ルドルフ・ブルトマンという聖書学者の研究成果に関する論議としてであつた。

バルトのそれは、実に感動的な受容であつたが、ブルトマンのそれは私の聖書信仰に深刻な衝撃を与えた。しかし、その衝撃は、次第にわたしの聖書理解、福音理解に希望と勇気とをもたらすものへと変わつていった。

聖書の批判的研究とは、一つには聖書を歴史的に問う、という作業のことであり、他の一つには、聖書の内容の真理性を問う、という事である。

聖書を歴史的に問うとは、聖書がどのようにして成り立ってきたかということを通じて研究することである。つまり、聖書を歴史学的、文献学的方法をもつて研究するということであ

る。

また、聖書の内容の真理性を問うとは、聖書が人間に提示する真理性を、現代という時代状況に生きている人間の現場に問う、という作業のことである。

ブルトマンという聖書学者はこれらの二つのことを自分の信仰の求道の作業として、特に新約聖書の福音書を誠実に研究することにより、その結果を私たちに提示した人だと思う。その意味で、現代という時代状況に聖書が提示する福音信仰に生きる同時代人である私達ひとりひとりにとって、彼が提示したことは、決して無縁の事ではないのである。以下、私が彼から間接的に頂いた事柄について記させて頂きたい。

×

×

信仰は「信・知」でなければならない。そして「信・知」に於いてこそ「覚」に至り、信仰は成るのだと思う。

「ただ信じるだけ」の「信」の信仰は狂信に陥る危険がある。狂信から人を救い出すのは知性である。知性とは、ものの理を考える力。ものごとを論理的に且つ自覚的に理解する能力のことである。自覚的とは自己検証し、自己否定する能力のことである。狂信は知性に於いて救われる。一方、「ただ論理的に理解するだけ」の「知」による信仰は、理性原理にもとづいた主観的な理屈に陥いる観念的な空論となってしまう。そこから人を救い出すのは「信仰」である。信仰と

は理性原理の究極に於いて越えた世界における出来事である。人間が己の「知」の限界点に於いて己を放棄する決断のそこで、初めて見えてくる「実有するもの的事实」こそが宗教の世界であり、そこに於いて知性は救われる。要するに、信仰は知性によって確かなものとして白覚され、知性は信仰によって完成させられる。そのような「信・知」の働きによって、人は初めて宗教的眞実を体得する「覚」に至るのである。これについては後でも少し述べさせていたきたいと思う。

×

×

聖書は神の言葉であり、従って人は聖書を「ただ信じ」そのまま受け入れることが、聖書に対する信仰人としての正しい態度である、と教えられて来た。つまり聖書はキリスト者にとって正典であり、聖なる書物であった。したがって、そこに記されてあることに疑問をいだき、問いを發することは罪であり、そのままを信じて受け入れることが信仰の証であると思っていた。たしかに、その態度には信仰人としての大切な部分が秘められているのだが、軽々に知性を放棄し、他律的教条的に、聖書だから、という理由で妄信することを信仰というならば、いささか軽率すぎはしないだろうか。信仰と知性とは対立するものではない。信と知は先にも述べたとおり、連続してはいないが「覚」に於いて共に完成するものだというのがわたしの体験的な思いである。その意味で、知を軽率に放棄し、信のみに立つ信仰は結局「信念信仰」または「教条信仰」に過

ぎなくなる。

知性の働きは「疑い」「問う」ことに於いて始まる。それはほかでもなく「求める」ということなのである。つまり、「疑」は「問」であり、「問」は「求」なのである。そして「求」はその究極に於いて「信」を経て「覚」で完成するのだと思う。これについては先にも言ったとおり後で少し語らせていただく。

ただ信ずることだけが求められて来た聖書、特に新約聖書のマタイ、マルコ、ルカのそれぞれの福音書の文献的な研究が、ヨーロッパで始められたのは十八世紀の終わり頃からだと言われている。そして十九世紀に入って福音書の本格的な研究が始まり、さらに二十世紀に於いて飛躍的に研究が進み、ある意味では行き着くところまで来て、次への新しい階段を模索しているというような状況であると、その道の専門家は教えてくれている。ただここでそれらの研究成果は、おしなべて蓋然性の域を出ないことを弁まえておかないと、わたしたちのような一般人は、つい、それぞれの研究者が出した結論を確実なものであるかのように思いこみ、それらにふりまわされる事になってしまう。このことは、聖書学の世界だけのことでなく、世の諸々の分野の研究成果に関しても言えることであって、軽々にそれらを絶対確実なこととして、全面的に受け入れて

しまふ愚かさは慎まねばならないだろう。特に聖書の批判的研究成果に全面的に傾倒することは、「知」だけあって「信」が欠落していると言えるだろう。

しかし、一方に於いて、その道の研究者の誠実な「問い」や「求め」の学的努力と成果等には、私たちは敬意をはらわなければならず、謙虚に耳を傾けるだけの「知性」をもっていなければならぬと思う。「聖書は神の言葉であり、人間が研究対象とすべきものではない」などという信念を振りかざして、聖書の批判的研究、またはその成果を拒否することは、妄信の域を出ない愚かなことであると思う。それは「信」だけあって「知」の欠落と言えるかもしれない。

×

×

先に「史的イエスと宣教のキリスト」の問題について少し述べたが、それは、「歴史的な存在のイエス」と「信仰に基づいて宣教されたキリスト」の関係の問題ということであるが、一般に「キリスト」と称しているそれは、信仰によって宣教ケリユヅされたイエス理解に基づくものである。

しかし、人々の歴史に対する関心が高まって来るにしたがつて、歴史に於いて存在し活動した「歴史のイエス」の実像、つまり「人間イエス」はどのような人だったかということが、その時代考証や社会的な背景をもとに、厳密に問う研究が始まってきた。それが所謂「イエス伝研究」である。その場合、その資料となるのは主として福音書、特にマタイ、マルコ、ルカの福音書であるとところから、それを「福音書研究」と言われ、そこから出てくる問題を「福音書問題」とい

うことになる。

これらの研究は、当然それまで「信仰によって宣ケリニユヅマ教されて来たキリスト像」に対して、歴史的なイエス探究の作業をすることになり、その研究態度は「宣ケリニユヅマ教のキリスト像」に対して批判的研究となる。そのような研究方法と態度を含めた聖書一般についての言い表しが「聖書の批判的研究」というのである。

×

×

以上のような「批判的研究」は、言わば「知」の努力の一つであって、それを「信」に対立するものとして見てはならないと思う。むしろ、批判的研究は徹底してなされるべきだし、なされた結果は、謙虚に有りがたく受け取ることによって、一層聖書が指示する真理性を確実なものとしていく事が出来るのだと思う。それを頭から拒否することは、正しい「信」ではなく「信念」という独善の「信」にすぎず、ひよっとすると、その信仰は「幻想」に過ぎなくなるのではないだろうか。

先に、私の前に突きつけられた問題として「聖書の批判的研究」が、ブルトマンという聖書の研究者の紹介を通してだったと記したが、当時は、二十世紀のヨーロッパに於ける研究成果が次々に日本語に翻訳され、キリスト教書店に出てきた。一般のわたしたちには、到底ついて行けず、一々それらに振り回されていては、何が何だか訳が分からなくなるばかりであった。その事につ

いて、思い出すことは、学問の分野は異なるがある有名な社会学者の言葉である。

「……およそ学問というものは、過去の蓄積の積み重ねの上になされるといふ本来の性質を持つておりますのに、学問史——近代日本の社会科学の歴史というものが——本当になされていないことは、大変遺憾なことではないか。これはいろいろな理由があると思います。通俗的に申せば、私どもの風土に非常に根強い最新流行主義——いつも最新の流行のモードを追いかけている。外国に新しい学説が出るとパッとそれを紹介する。——つまりファッションと似ておりまして、いつも新しいものを追いかけている——過去の蓄積の上に新しいものを創造していくというよりは、いつもニューを追いかけているということの一つの現れと見られます。それが、日本の、狭く言えば学問、広く言えば文化の底の浅さをなしているのではないかと思ひます。（「大山郁夫、生誕百年記念によせて」丸山眞男——一九八十年十一月の講演——）」

難しい学問の世界に無縁の私であるが、先の丸山氏の言葉は、そのまま日本のキリスト教神学の世界にも当てはまるのではないだろうか、門外漢なりに思ったりもする。それは、立場を弁えない者の批判としてではなく、次々翻訳出版される様々な外国の神学書を前にしての、私自身の心得として反省的に語っているだけである。

それにしても、キリスト教信仰の立場とは、どの人も、その時代の聖書理解の影響を受ける。「聖書だけ」と言う人も、その実、時代の神学的な思想状況の影響下にあることを決して忘れてはならないだろう。そして、聖書そのものがすでに、その当時の信仰理解に影響されて生み出されて来たものなのである。批判的聖書学は、その事を明らかにしてくれた。

×

×

神の言葉である聖書は、そのまま信ずるものであって、人間が勝手に他の書物と同じように研究の対象とすべきではない、という古来から教会の伝統がある。そのような観点からすれば、聖書の批判的研究は聖書が持つ伝統的権威に対する挑戦と見なされる。

ヨーロッパの中世において教会の権威の下にあった社会では、聖書が持つ権威に逆らうことはその人の死を意味していた。近代に入ってからでも、コペルニクス（一四七三～一五四三）やガリレイ（一五六四～一六四二）の地動説は聖書に反する異端説として退けられ、信仰者としての熱心な自らの研究も、コペルニクスは三十年間も自説を公にすることなく、遂に生前は発表しなかったし、後に彼の説に賛同したガリレイをはじめ多くの科学者は異端審問にかけられ、ガリレイに次のような判決がくだされたことを、パークレイは記している。「太陽が中心であり、地球の周囲を回転しない」という最初の部分は馬鹿げており、不条理な神学上の誤りであり、異端である。それは聖書に矛盾するからである……第二の部分、地球が中心ではなく、太陽の周囲を回転

するというのは、不条理であり、哲学上の誤りであり、少なくとも神学上の見解からして、まことの信仰に反する」。その結果、彼は次のように署名した。「私、ガリレイは七十才にして、囚人として脆ひよますいており枢機卿すうききやうの前において、聖書を前にして、それに手をおき、地動説を誤り、また異端として放棄し、呪い、嫌悪します」と。しかし、彼は死罪を免れただけで、死ぬまで牢獄から出ることはなかった。

この事についてはマルチン・ルターも次のように言ったという。「人々は成り上がり者の占星家（コペルニクス）に耳を傾けた。彼は天や大空や、太陽や月……ではなく、地球の回転を示そうとした……。この愚か者は、天文学の全体をくつがえそうとした。しかし、聖なる聖書はわれわれに、ヨシユアが、地球ではなく太陽に静止するように命じたと言っている」

×

×

このようなキリスト教会の体質は十九世紀はもちろん二十世紀に入っても基本的には変わっていない。「聖書解釈の新しい方法である聖書批評学が確立されるには、多くの躓きが経験され、強い反対にも遭遇せねばならなかった。チュービンゲンのシュトラウス（一八〇八〜七四）やアバデーンのスミス（一八四六〜九四）などの学者は教授職を剥奪されたし、ドイツの偉大な旧約学者ヴェルハウゼン（一八四四〜一九一八）は、自分の仕事に、牧師を目指して彼のもとに学びに来る学生達のためにならないと考えて教授の地位を退き、セム語講師の地位に甘んじた。」

(キリスト教神学事典・教文館) そうである。

×

×

このような雰囲気は、今日の教会に於いても基本的には変わっていないように思う。聖書の批判的研究等を受け入れると、聖書に基づく信仰が失われてしまうのではないかと、恐れているようである。事実、批判的聖書学を受け入れたら、その道にいる信仰者が、聖書に対する不信の故に、自らの信仰を捨てたり、失つたりする事もあると聞く。しかし、わたしに言わせれば、それはまことに奇妙な事であつて、聖書が真理を指示し、証示するものである、ということをしつかりと了解していれば、聖書に対するどのような批判的学問といえども、それはかえつて有り難い事であつて、決して聖書の權威を失墜させることにはならないと思う。

×

×

しかし、聖書が語る全てを歴史的な事実としたり、聖書が語る出来事、又は、その一字一句に即物的に縋り付いている者にとつては、批判的聖書学は、その縋り付いている出来事や字句を批判する故に、まことに厭うべき学問となり、その学問的成果を受け入れることは、自らの聖書信仰を根本から崩壊させてしまう恐るべき悪魔の業となる。なぜ、そうなるのか、再度言うが、それは聖書が真理を指示するもの、または証示するものであつて、それが何処から出て、何を指し示しているのかということ、深く問わず、悟り、知ることなくただやたら、聖書の字句にしが

みつき、そこに自分の信仰の拠り所を求めているからである。端的に言わせていただくなら、聖書が批判的聖書学によって、その歴史性や字句が批判されたことで、自らの聖書信仰が崩壊してしまうような字句信仰なら、初めから持たないほうがよい。なぜなら、聖書はその言葉も出来事も方便として、真理性を指示し証示しているものだからである。聖書に於いて大切なのは、指示し証示している真理性とその根拠であって、文字や出来事それ自体ではないからである。そのような意味での聖書の真理性は、聖書の文言や出来事がどれほど批判され、切り刻まれ分解されようと、決して揺らぐことはないのである。

×

×

聖書の批判研究とは、一つには聖書を歴史的に問う、という作業であり、他の一つは、聖書の内容の真理性を問う、ということであると先に言ったが、第一の聖書を歴史的に問う作業は、福音書については、歴史のイエスを問う作業となつて展開された。そのために、信頼される資料の確認が、マタイ、マルコ、ルカの福音書に文献学的研究の手法が用いられた。その手法は、すでにギリシヤやローマの古典文学の解明に広く用いられているもので、内容は、本文批評、史的批評、文法批評、文芸批評、様式批評、伝承批評、編集批評、などであると言われている。難しい専門的なことを述べる能力は私にはまったくないが、要するに聖書も一つの人間の世界に現れ、生み出された文学形式の書物である以上、その方法を適用することは、正典としての聖書成立の

経緯を知る上で最も有効な方法であると言える。

その結果、様式史的研究が福音書について出した成果については、八木誠一氏の次のまとめが最も的確だと思うので紹介しておこう。

「一つは、イエス伝承が初めは『断片的な口碑伝承』であったことです。最初の『福音書』を書いたマルコは、実際の出来事の時間的な順序を知らないまま、集めた伝承をつなげて『福音書』を書いてしまったのです。そうすると、もう我々は時間的順序は確定しようがない、ということ。もちろん、イエスは洗礼者ヨハネから洗礼を受けた。このことはイエスの公生涯の初めにあつて、十字架上で死んだというのが後の方にあるというのは当たり前ですが、その間のこととは因果関係を設定出来るような仕方で……「イエス伝記」はもう書けない、それはもう不可能であるということです。」

「第二に、イエス伝承には、「座」があるということです。つまり伝承は教会生活のなかのいろいろな営みの「場」の中で形成もされたし、発展もしていった。詳しくみると——これはブルトマンがやったのですが——発展のプロセスをかなりの程度追求することが出来るのです。つまり、伝承の初期には名前の無かった人に、後で名前がつけられるとか（『マルコ』十四章四七節と『ヨハネ』十八章十節を比べよ）。不特定のものが特定化してくるとか（『マルコ』十四章四

七節の「片耳」が『ヨハネ』では「右耳」になっている。ところが、教会生活の営みというものは、客観的な「イエスの歴史」に関心を持っていてはならず、「イエスはキリストだ」という「信仰生活の場」なのです。……つまり、「イエス伝承」は全体として「イエスこそがキリストだ」ということを宣べ伝える、信仰の言葉として形成され、また発展していった。（歴史のイエスを語る―春秋社―）

以上のことがらに関し、私の場合は一九六八年頃の当時、ブルトマンの「イエス」（川端純四郎・八木誠一訳―未来社―）を読み衝撃と納得を覚えたのを思い出す。また、ブルトマンの「共観福音書伝承史」Iが一九八三年に加山広路氏訳によつて新教出版社から出されたが、この書の福音書に対する厳密な分析と批判には、いささかショックを覚えた。

とにかく様式的研究とは、福音書をそれぞれの伝承単位に分解し、それぞれの様式に従つて分類して、その形式での最も古い層の伝承を求め、それをもとにして「歴史のイエス」を再構成しようとしたのである。それに続いて起こってきた「編集史的研究」とは、古い伝承に、後で何が付け加わっていったのか、ということを経史的に求めようとしたのである。

×

×

歴史的なイエスの実像、つまり史的イエスの再構成を求め、そこにキリスト教の原型を見ようとする学的努力のあらわれがイエス伝研究史であったが、第二次大戦後すでに述べたように様式史研究や編集史的研究という方法などが適用されるようになり、研究者の結論によると、聖書の最初の伝承は断片的な口伝であり、それらは原始教団が形成されて行く宣教途上に於いて展開された論争や祭儀によって成ったものであると言われている。とすると、伝承の内容はイエスこそキリストであるという信仰の表現であつて、原始教団によって付け加えられたり改変されて伝えられ、全体が歴史的なイエスをそのままに伝える報告ではないということになった。その結果、もはや今日に於いては、イエスの言行全体、即ち、いつ、どこで、何をされたか、ということとは時間的順序も含めて、確実にイエスの伝記的再構成をすることは出来ないということになった、というのが様式史研究が出した結論のようである。

以上のような状況の中で伝承のより古い層を求めて史的イエスに近づこうとする研究が続けられる一方で原始教団が伝承を（福音書の記者たちが）どのような信仰の観点から編集したのかという研究技術が伝承分析に向けられるようになってきているらしい。

さて、先に述べたとおり福音書の歴史学的批判は、その内容についての批判的研究にもつらな

つていった。即ち、新約聖書の考え方の宗教史的研究である。新約聖書の考え方は当然のこととして、その時代の思想の影響と規定を受けており、そのもとの聖書独自の真理性の表現となっているわけである。そうすると、その当時の考え方のそのままを現代に於いて語ることは、それを理解するうえで無理が生じてくることになる。そこで聖書を解釈する点での問題として、新約聖書の古代的な真理表現を現代人にも理解出来るようにするためにはどうすればよいのかという、この問題に正面からとりくみ、一つの答えを出したのがブルトマンの「非神話化論」であった。彼は此の問題を一九四一年に「新約聖書と神話論」のもとになる講演をおこなっていたようである。この問題は忽ち国際的規模で論議されるに至り、日本に於ける私たち一般の者にも届き、私が初めてそれに接したのは新教出版社から出た山岡喜久雄訳の「新約聖書と神話論——新約聖書の宣教の非神話化の問題」という書物によつてであり、同時に熊沢義宣氏の「ブルトマン」という解説書であった。それは一九六二年頃だったと思う。

×

×

ブルトマンの「聖書の非神話化」などという噂を耳にしたとき、その「非神話化」とは福音書にある神話的表現、例えばイエスが行った不思議な業そのことを、ただの神話的表現であると決めつけ、全面的に否定する神学的作業だと理解していた。しかし、それは全くの誤解であり、事實は、聖書の神話論的表象が秘めている真理性を、現代人に躓きとならぬようにどのよう

すればよいのか、ということに対する真剣且つ積極的な問いと答えとしてブルトマンが提唱したのだった。もう少し詳しく言えば、彼の「非神話化」の作業には二つの方向性があると言われる。一つには新約聖書の世界像は神話論的、つまり、彼の「新約聖書と神話論」によるとその世界像が三つの階層、即ち、中央には大地、その大地の上には天界、大地の下には下界（冥府）、そして天界には神と天使が住み、下界は苦悩の場所で悪鬼（サタン）が棲息し、大地に住む人間はたえず神や悪鬼が干渉してくる。こうした中で人間は罪と死の奴隷になっており、終末的な破局に向かっている。そうして今や、終末の苦しみと天的審判者が到来し、死人は復活し救いと滅びのための審判が近づきつつある。新約聖書の救済の出来事はこのような神話的世界に対応して語られている。そのような状況の中で、神は時満ちて先在的な神の子を人の姿をして地上に遣わし、十字架の死によって人間の罪を贖った。イエスの復活は宇宙的な破局の開始であって悪鬼（サタン）は力を失いキリストは復活し天に挙げられ、神の右に座し主とされ、やがて救いの業を完成するために天から雲にのって到来する。かくして、死人の復活と審判がおこなわれ、罪と苦悩とは滅ぼされる。この出来ごととは間もなく起こる。しかし、キリストに在って洗礼と聖餐にあらずかり聖霊によって守られている者は救われる、というのである。

以上のように新約聖書が救いについて提示していることは極めて神話論的であり、その一つ一つのそれは、ユダヤ黙示文学的、且つグノーシス贖罪神話に帰せられるとブルトマンは言うので

ある。だからと言ってブルトマンはそれら神話論的なことがらを削除すべきだなどとは言わない。そうではなく、それらの神話論的世界像を承認したうえで、それらが含んでいる実存理解、即ち、神話論的言表が含んでいる人間の眞実存在のあり方を、現代人に明確化するという方向づけ、つまり「解釈」するというのがその一つである。

二つには、現代人にとって不必要と思われる神話的表現を除去することによって、本来福音が秘めている本質的躰きである歴史に於ける神の行為という逆説に於ける眞理性を明確化、即ち宣教の本質を明確化しようとする作業である。とすると、ブルトマンが提唱した「非神話化論」とは、神話を不合理なものとして排除して現代人に合うように合理化しようとしたのではなく、むしろ彼は經驗的な現実と聖書の神話的表象心情を自分の問題として苦悩の中から聖書が提示する眞理性を積極的に且つ、肯定的に明確化しようとしたのが「非神話化論」であつたのである。その意味に於いて、新約聖書の神話的言表を無条件に、又盲目的に「聖書だから」という理由だけで信じ、受け入れることが信仰だと教条的または原理主義的、さらに一方的に突きつけて事足りとする態度には、現代人が持っている苦悩を無視する独善的觀念論的原理主義があると言えるだろう。

彼はどこまでも經驗的現実又は、歴史的現実をよく踏まえて現実を媒介として新約聖書が提示する信仰を理解しようとしたのである。しかし、彼はさきにも述べたとおり、史的イエスの再構

成を不可としつつ、結局別の使徒的宣教、つまり原始教団の信仰の公理を出発点とする。その意味では彼もバルト的であると言えよう。ここにブルトマンの限界と問題性があると指摘されることは、わたしのようない信仰人にも同意出来る。言うならば「わたしの信仰」に於ける問題は、むしろ、そこから始まるのである。即ち、「使徒的宣教がどうして成立したのか。それが何を根拠として正しいと言えるのか。」ということにはブルトマンは答えていないと、或る人達は言うが、「わたしが問いつづけて来たこと」の根本的な事柄は、実はそれであったのである。

勿論、ブルトマンという聖書学者はその学識に於いて、研究に於ける問題意識に於いて、ただの牧師にすぎない私などが、到底及ぶところではない。ブルトマンについてこれ以上論ずることは僭越であり、全くの論外であろう。彼について興味のある方は、それぞれの専門書で学んでいただきたい。

結局、ブルトマンの論をめぐって世界的規模で議論、特に「史的イエス」と「宣教のキリスト」との関連で問題が提起された。八木誠一氏の要約でもって紹介しておこう。

- 一、歴史のイエスの姿はどういうものだったか、その復元の可能性はどの程度あるのか。
- 二、歴史のイエスは神の国を宣べ伝え、それに対して原始教団はイエスをキリストとして宣教したのであるが、二つの宣教の間の関係と内容的関係はどういうことになるのか。

三、歴史のイエスがキリストであるとは何を根拠として言えるのか。

四、結局のところイエスがキリストであるとは何を根拠として言えるのか。また、イエスがキリストであるということはどういう意味なのか。「神は何処で見出されるのか」

正直に言って、上の(二)以下の問題に、満足な答えを提供する人は皆無とは言えないが、少なくとも伝統的な教会に於いてはまともに答えてはくれない。そういう問題意識すら持っていないように思う。「ただ信ずるのです」と叫び続け、問を抱く者に対して「不信仰」という答えが帰ってくるだけであるなら、とても悲しく思う。

それぞれの世界で、それまでの成果を総括する働きをしつつ、それが同時に新しい課題への出発を促す働きとなるような人がいる。ブルトマンという人は正に現代の聖書学の世界で、それを行った代表的な神学者の一人であった。その意味で、聖書を語る場合、それがどのような立場からであっても、また、その深淺がどうであれ、ブルトマンが提示した問題を無視してはならないと思う。

神学者ブルトマンにはいくつつかの顔がある。「新約学者(伝承の研究者)としてのブルトマン、

解釈者としてのブルトマン、さらに神学者（カール・バルトを代表とする弁証法神学者の一翼を担っていた神学者）としてのブルトマン」―ブルトマン著作集6「イエス」の解説あとがき・新教出版社―

伝承の研究考としてのブルトマンが言うには「あれは（「イエス」という本は）歴史家としての自分と、歴史的文献との対話なのであって自分の信仰にとつては意味がない」と。また、解釈者としてのブルトマンは、「イエスには預言者と律法教師解釈者としての両面を合わせ持つっており、その二つの面はどこで結びつくか、それをブルトマンはイエスの実存理解に見た」さらに、神学者としてのブルトマンはカール・バルトが聖書に証しされたイエス・キリストだけが神の啓示であり、それだけがわれわれの信仰にとつて意味があるという立場とは異なり、原始教団の宣教が出发点であり、キリスト教の公理であるとする。―前掲書―

×

×

以上のブルトマンの立場を総括して言えば、それまでの伝承研究に一つの結論を出し、さらに、福音書の伝承に対して解釈を行い、何をもってキリスト教の出发点とするかを明確にした、と言える。しかし、それは同時に、新しい問いを生み出す結果になった。それについては先に八木誠一氏の要約として紹介したが、別な言い方をすれば次の三点になる。

彼は原始教団の「イエスコそキリストだ」という信仰告白から出発するのがキリスト教であり、

信仰にとって意味があるのだと言うが、それなら、肝心の歴史のイエスの思想の位置づけはどのようなものか、つまり「宣教のキリスト」だけあって「歴史のイエス」不在のキリスト教とは何なのか。預言者としてのイエス、また律法解釈者としてのイエスは、神の支配を提示したが、その歴史のイエスと「イエスコそキリスト」という信仰とはどのような関わりになるのか。何故そのようなになったのか。そして、現在の私たちにとってイエスという歴史的な存在はどういう意味を持つのか。といった問いがブルトマンの弟子を含めた神学者一般から起こって来たのである。しかし、このような問いは神学者だけでなく、私たち一般の信仰人にとっても、当然生じてくる問いだと言える。このようにして、新しい問いがブルトマンの総括から起こってきたのである。けれど、このような問いは理屈のことではなく、キリスト者一般にとって切実な問いであると言える。

×

×

わたしがキリスト教に接した頃（一九四八年頃）には、すでにカール・バルトの神学が全盛を極め、日本の教会一般にもバルトブームが波及していた。バルトの基本的な立場は「聖書が証しするキリストが神の啓示である」ということである。彼がそのような立場に到達したことには、一九〇〇年代初期に牧師として聖書を説き明かし、牧会に情熱を傾けていたその働きの中で、「聖書に証しされている神のことは具体的な人間に語るといふ説教の課題を果たすに耐えない、

当時の自由主義神学に懐疑を抱くにいたった」現場に於ける苦悩からであった。

自由主義神学は、十八世紀から十九世紀の西欧文化の思想史における人間理性を中心とする「理性の時代」としての啓蒙主義を背景として生じて来た。啓蒙主義は、人間があらゆる問題を解決する道具として「理性」を最も權威あるものと位置づける。また、経験主義的方法によって見いだされる「自然的なこと」を大切にし、理性の働きによつてすべては進歩するという立場である。さらに、伝統が持つ權威を認めず理性が認めるそこに正義も倫理も道徳も健全であると説く。そして、政治についても啓蒙専制君主によることを理想とし、国家については社会契約説的な国家論を理想とした。神については、自然を秩序ある全体と見なし、神による超自然的な介入は拒否され、宗教信仰については啓示を理性にかなった範囲内においてのみ認めるという立場である。

以上のような啓蒙主義の影響下に育ったのが自由主義神学である。その内容は、真理の求め方に於いて人間的真理とキリスト教の真理との間に断絶を考えない。つまり、啓示と理性、神と人間とを分離しては考えない。真理は経験のうち理性の導きによつて発見されると主張し、聖書もただの文学作品の一つに過ぎない書物だとする。そして聖書にある倫理を重視し、実現されるべき道徳の理想像を説いた。その結果キリスト教が単なるヒューマニズムを個人的にも社会的にも説く宗教になってしまった。と同時に人間理性を基本とする観念論哲学の一つであるかのよう

になつてしまつた。

このようなキリスト教会の状況の下で、聖書を説き、魂の救済を願う牧師としてバルトは苦悩し、「聖書に証しされている神のことは具体的な人間に語るといふ説教の課題を果たすに耐えない、当時の自由主義神学に懷疑を抱くにいたつた」のである。

×

×

単なる「倫理」の提示者、実行者としてイエスを見、「宗教的な感情」（シユウラエルマツハ等の見解）や「経験」（ジョン・ロックなどの見解）といったものを基盤において、キリスト教を見ようとしたそれに対して、バルトは必死の思いで「それは間違つている」と叫び、キリスト教は「聖書が証しするキリストだけが啓示であり」、それ以外のいかなるものもキリスト教の根拠としてはならない、と言いつつたのである。これは自由主義神学に対する反対の態度表明であると同時に、キリスト教と教会とがよつて立つところの根拠の提示であつた。

バルトのこの態度表明は、単なる人間学になりさがつた神学と信仰のあり方に疑問を抱いていた人々の共感を得、一九二〇年代から三〇年代にかけてヨーロッパに広がり、やがてイギリスやアメリカ、そして我が国の神学界にも受け入れられ、正統派神学の位置を占め、わたしのような神学ということには縁遠い者にまで及んだのである。

このようなバルトを中心とした神学の立場を「危機神学」又は「弁証法神学」さらに「神の言

葉の神学」と称されるがいずれにしても、聖書の信仰が先に述べた如く人間の経験や内在的なものを中心として理解され、極めて樂觀主義的な傾向に毒されており、聖書による信仰の立場が「危機」に瀕しているという認識による、その故に「危機神学」と呼ばれる。その一方で神の言葉（聖書の言葉）に立ち返らなければならないという態度の故に「神の言葉の神学」とも言う。更に、「弁証法神学」とは、神と人間との関係が、体験的に又心理学的に、且つ思弁的に、繋がっている関係ではなく、断絶されており、ただ聖書においてのみ神の啓示は確実となる。そして聖書の告知は聖霊の働きによる出来事として起こるが、それは、人間に対して否定と同時に肯定としての内容を持ち、それに対して只信仰による決断においてのみ、神の肯定、即ち救いという出来事が逆説的に神の一方的恩寵として個人に生ずるといのである。それは神と人との無限の質的差異を自覚する信仰的思惟の弁証法である。これはバルトがキールケゴールから学んだことでもある。

このようにして、バルトはキリスト教がこの世の人間の思惟によって支配され、その命を失いかけた危機を「聖書が証しするキリストだけが神の啓示である」。人間はその前にたち決断することによってのみ救われるのだと提示することによって、キリスト教会を本来の道に戻し、その進むべき道を示したのである。その意味ではルターやカルビン等の宗教改革者がなした業に匹敵すると言える。